

村上 隆 1993 名古屋大学における前期日程入学者と後期日程入学者の比較 1992年度科学研究費総合研究(A)「大学入学者の犠牲と選抜方法との関連についての追跡調査研究」報告書, 169-173.
村上 隆 1993 学習の評価・個人差とその測定 原岡

一馬(編著)『教育心理学』日本放送出版 128-136, 137-147.

村上 隆 1993 情報処理教育センターとのお付き合いこれから 名古屋大学情報処理教育センター広報, No. 25, 8-12.

研究経過報告

池田 豊 應

1. 登校拒否研究

昨年の本紀要で報告した登校拒否生徒のための「ヨコ体験グループ合宿」の試みは、今年も昨年と同様、三月末に旭高原で行われた。その後も同じグループで定例会や合宿が継続され、スタッフだけの研究会も続けられているが、やはり二年間の積み重ねというものは重く、この間の生徒たちの変化、成長には非常に大きなものがあった。その内容は本紀要には報告できなかったが、一部は本年五月の東海心理学会において発表した。

本学部の「中等教育研究」第4号には、その「中等教育改革の課題：世界と日本」という特集に合わせて、「池田豊應 1993 登校拒否論から見た現代の精神的状況—タテとヨコの社会学—」と題する論文を書いた。

また、スタッフの参加経験についての検討は、名古屋大学教育方法等改善経費研究報告書に載せられた(池田豊應 1993 臨床的教育・訓練の方法としてのグループ・アプローチ—登校拒否グループ活動へのスタッフ参加経験から— 名古屋大学教育学部)。

昨年、刊行予定として報告した「青年期登校拒否、ヨコの広がりをめざして」は、まだ日の目を見ることができていない。原稿の量が非常に多くなりすぎたので、もう一度、スリムに減量させねばならなかったためである。大体、その作業を終えたところであり、今度こそは大丈夫と思っはいるが、経過報告とはいえ予告をあまり早まっては格好が悪いと大いに反省させられている。

2. 青年期危機研究

本来は上に述べた編著書の一部であったが、そこに入

りきらないために独立した論文として本紀要に載せたのが「青年期危機における“現存在実現”の空間性—タテとヨコの現象学—」である。これはずっと前々から関心のあったテーマであり、よく口にしてはいる事柄であったが、あらためて文章化でき幸いであった。

このテーマに関する本来の総合的まとめを行わなければならないが、まだ少々の時間を必要としている。

3. ロールシャッハ研究

ロールシャッハ法に関する研究は、あいついで次の二つがまとめられた。

高橋昇報告・池田豊應コメント 1993 「華やかなシニフィアンに遊ぶ少女」の事例 岡堂哲男編 こころの科学増刊 心理テスト入門 日本評論社

池田豊應 印刷中 神経症者のロールシャッハ反応 岡堂哲男編 現代のエスプリ別冊 精神病理の探究 至文堂

4. 現象学研究

「人間性心理学研究」の特集「現象学と心理学」の編集を村本紹司氏と共同で担当して、私自身は次の論文を書いた。

池田豊應 1993 (本年12月刊行予定) 現象学と心理臨床 人間性心理学研究 第11巻第2号

5. その他

1, 2とも関連して新しい学校づくりの動きに関与し、いろいろと考えさせられることが多いが、その一端は、上と同じく今年の東海心理学会で発表した。

(平成5年11月12日)